

以下に紹介する文章は、『道の三つの根本 (lam gtso rnam gsum)』のパボンカ・リンポチェによる注釈「聖なる道に通じる扉を開く (lam bzang sgo 'byed)」の英語版に、ケン・リンポチェ・ゲシェ・ロプサン・タルチン (1921-) が寄せた序文である——

イエシエ・ロプサンは、いつものように天上をぼんやりと見つめたまま、ぽかんと口を開けて座っていた。僧侶たちは互いに向き合って列をなして座り、「ラマの供養」という、とても神聖な経典の読誦を行っている最中だった。これは、まだ私が幼かった頃、セラ寺というチベットでも有数の仏教寺院で勉強していた頃の話である。

彼は私から三メートルくらい離れたところに座っていて、ずっと口を開けたまま、夢見心地の様子だった。当時、私は相当のいたずらっ子で、遊び仲間たちとつるんで、よく悪さをしたものだ。その時も、私の両側に座っていた二人の悪友たち——彼らも読経にあまり集中していなかった——と企んで、「例のモノ」がイエシエ・ロプサンの口にうまく命中するかどうか、賭けをすることになった。

私たちはこのゲームを「パクダ (ツァンパ砲)」と呼んでいた。ツァンパという穀物の粉で作った小さな団子を指で弾いて、うまくターゲットに命中させるのである。私はこれが得意だった。先生から言いつけられた課題が早く終わった時には、よくそんな悪戯をして遊んだものだ。

イエシエ・ロプサンは依然、口をぽかんと開けたままである。まさに格好の標的。私は、他の僧侶たちの読誦の声次第に高揚してきた時を見計らって、慎重に狙いを定め、思いきって奴の口めがけて、その「パクダ」を発射した。

——ズボッ！

パクダはものすごい音を立てて、みごと奴の口に命中した。と言うより、うまく命中しすぎて、イエシエ・ロプサンの喉につかえてしまったのである。彼の表情はそれまでと一変し、眼を白黒させて、喉に詰まったパクダを何とか吐き出そうと咳き込み始めた。それを見た二人の悪友たちは、どうにも笑いをこらえることが出来ず、とうとう腹を抱えて笑い転げ始めた。

何事かと思った先生——といっても、彼は儀式のあいだ若い僧侶たちの監視をする先輩の僧侶であり、学生寮の寮監である——が慌ててやって来て、この騒動の「犯人」が私達であることを突き止めた (ちなみに、両隣にいた友人たちはまだ笑い転げていたが、私は何もなかった風に澄まし顔で座っていた)。先生はさっそく、こういう時のために予め用意されている小さな棒を持ってきて、私の両隣に座っていた二人の友人たちを物凄い勢いでひっぱたき始めた。二人は痛くて痛くて、とうとう泣き出してしまった。しかし、笑いのほうはどうしても止めることができない。それを見て怒った先生は、更に彼らを叩く。(その間じゅう、イエシエ・ロプサンはずっと咳き込んだままだった)。一方、僕は悪友たちを横目で見ながら、澄まし顔で善良な小坊主を装っていた。そのおかげで、うまく罰を逃れることができた。あとで、

——イエシェ・ロプサンの、あのぐしゃぐしゃの顔、見たかよ！

あれが見ただけでも、先生にぶたれる価値はあったよなあ！

読経を終えた後で、二人の悪友たちは笑いながら私に言った。

僕が要領よく罰から逃れたことは、全然気にしていない様子だった。

これがセラ寺で過ごした幼い頃の思い出で、いまでもはっきりと思い出すことができる最も典型的なシーンである。チベットの多くの子供達がそうするように、私も幼い頃——1928年、7歳の時だった——お寺に預けられた。初めの頃は、両親や兄弟、姉妹たちと離れて生活することが本当に淋しかった。しかし、この新居はやがて一人の少年にとってかけがえのない素晴らしい場所となった。当時この寺院には、50人ほどの同年代の少年達がいた。悪戯をして、うまく先生の罰を逃れることができた時の、あの何とも言いようのない満足感。そして、25年間に渡る厳格な共同生活を通じて、私と友人達との間に芽生えた兄弟愛にも似た感情——私はそんな生活を終えて、‘ゲシェー（仏教学博士）’という、たいへん名誉ある資格を獲得して、この僧院を卒業することができた。

私は当時、ギャロンという僧院で生活を送っていた。セラ寺は三つの研究機関から成っているが、その中の一つがセラ・メイ仏教大学であり、さらにセラ・メイ仏教大学が約15の僧院に分かれていて、その中の一つがギャロン僧院である。この僧院では、最盛期には八千人の教師と学僧たちが共同生活を送り、仏教の叡智が記された古代文献の研究に励んでいた。

私達の寺はラサ、つまりチベットの首都の近郊にあった。チベットは、エベレストやヒマラヤに囲まれた山地の国で、インドの北側、中国の西側に位置している。仏教が初めに広まったのはインドだが、チベットは仏陀の教えが今日まで生きてきた地域である。仏陀の教えは1000年以上も前に私達の国に伝えられ、チベット語に綿密に訳されたのち、私達が住む山々の寺院に保存された。

私たち僧侶は、決して上品なほうではなかった。当時、私たち若い僧侶は、よく先生に連れられて、お寺の裏にある岩山に湧き水を汲むためのバケツをもって出かけた。そこで私たちは、何時間かブラブラとしながら、時間をつぶしたものである。エンジ色の僧衣に脚をくるんで、布が擦り切れるまで長い岩肌を滑り落ちて遊んだこともあった（それで、また寮官からひどくとっちめられた）。また、石投げも暇つぶしには最適である。今でも覚えているが、私は一度、自分が投げた石がトカゲに命中してしまい、偶然とはいえ、そのトカゲを殺してしまったことがある。その時、私はとてつもなく深い後悔の念に苛まれたことを今でもはっきりと憶えている。私たちは、全ての生き物には感情があり、どんな生き物でも人間と同じように、幸福でありたい、苦痛から逃れたいと思っている——そう信じているからである。

お寺に戻る帰り道、お気に入りの悪戯は、正門までの道に画鋲を並べることである。私たちの国は、ヒマラヤ山脈の背後の、周囲を山々に囲まれた小さな地域にある。よくチベットのことを‘雪国’と呼ぶ人がいるが、実際にはこの言葉から連想されるほど寒くはない。僧侶たちの何人かは、裸足で歩くことを好んでいた。私たちは正門の陰に隠れてクスクス笑いながら、獲物の足が

画鋏に触れるのをじっと待っていた。そして獲物が画鋏に引っかかると、僧衣を風にはためかせて、追い駆けっこが始まるのである。

部屋にいるときも、私は決して模範的な生徒などではなかった。私が住んでいた宿舎の寮長はゲシェ・トゥブテン・ナムドゥルと言って、哲学の研究課程に正式に進学するまでの間、私たちに読み書きを教えてくれた。彼は私と、私と同じ部屋に住んでいた友人にとっても厳しかった。当時ルームメイトだったその少年は、いつもさぼっていることで有名な悪友で、これはすぐさま私にも伝染した。私は仏教論理学と問答法の初等課程に進んだとき、試験で良い成績を取ったり、課題として出されているものを早く覚えたり、論理学上の原理を早く暗記することをだけを、ただうわべだけやって、それをちゃんと心の中に修めようとはしなかった。それで結局、私たちは、智慧の意味について学ぶ次の12年間の課程に進むまでの間に、かなり悪い評判を得てしまったのである。

このころ、私の宿舎の指導を担当していたゲシェ・トゥブテン・ナムドゥル先生は、首都からはかなり南方に離れたロカ地方という場所にあるガンデン・シェドゥブ・リンという寺院の管長に任ぜられた。これは大変名誉なことである。なぜならこの地位は、カシャ——チベット政府の内閣——によって任命されたものであり、また、私たちの国の偉大な精神的指導者であるダライ・ラマ本人によって認可されたものだからである。それに、このポストに就けば、かなりの収入を得ることも期待できる。ゲシェ・ナムドゥルの右腕として働けば、私もその収入の分け前に与えるかもしれない。これは、私には到底できそうもないこれから先の厳しい学問課程から優雅に身を引き、前進することができるチャンスだ——誰もがそう思ったのである。

皆さんがこれから読もうとしている注釈書の作者であるパボンカ・リンポチェを私が知るようになったのも、このくらいの時期だった。パボンカ・リンポチェは、私とおなじギャロン僧院の出身であり、幼少の頃からセラ寺のセラ・メイ仏教大学で学問の研鑽を積んだ人物である。

パボンカ・リンポチェは、1868年にラサ北部のツァン地方、イェル・シャン地区にあるツァワ・リという町で生まれた。彼は高貴な家系の生まれで、チャペル・ゲルシと呼ばれる私有地を所有していた。幼少の頃から非凡な才能を発揮し、7歳の時に、当時の偉大な宗教指導者であったシェルパ・チュージェ・ロプサン・ダルギェのもとに連れてこられた。

シェルパ・チュージェ・ロプサン・ダルギェは、その少年が聖者の転生者であるかどうか、特に嘗て自分の師であった人物の生まれ変わりであるかどうか確かめるために、色々テストを行った。しかし、彼が聖者の転生であることを示す徴を見つけることはできなかった。だが、この賢者は「この子がセラ・メイ仏教大学のギャロンに留まれば、将来、何かすばらしい出来事が起こるであろう」と予言した。

その後この少年は‘チャンキャ’と呼ばれる系譜に属するラマの転生であると認められた。チャンキャの法統は、チャンキャ・ロールペー・ドルジェ (1717–1786) ⁽¹⁾をはじめ、優れた学者を沢山輩出している。この系譜に属するラマたちは、モンゴルや中国で——ときには、中国皇帝の宮殿でも——法語を行ったことで知られており、それ故‘チャンキャ’という名前には、中国語の意味合いが色濃く含意されている。当時のチベット政府は既に、東の隣人から加えられる圧力に敏感になっていた。だから、その少年には‘チャンキャ’という名前が外されて、代わりに‘パボンカ’という名前が与えられたのである。

パボンカ——‘パロンカ’とも言う——とは、セラ寺から歩いて三マイルほど離れた所にある岩層のことである。‘パボン’という語は、私たちの言葉では、‘巨石’とか‘岩の塊’を意味する。チベット人にとってこの場所は、歴史的にとっても重要な意味を持っている。この岩層の上には、あのソンツェン・ガンポの宮殿があったとされるからである。ソンツェン・ガンポは七世紀のチベットの王で、当時のチベットをアジアの先進国に育て上げた人物だった。それに、何よりも有名なのは、彼がインドからチベットに仏教を移入することに多大な貢献を果たしたということである。

ソンツェン・ガンポ王は仏教の膨大な経典を私たちの言葉に翻訳したいと考えていたが、当時のチベット人は文字を持っていなかった。そこで王は使節団をインドに派遣し、彼らに文字を持ち帰るように命じた。しかしインド平原とチベット高原の気候は全く異なっている。そのため、使節団に参加した多くの若者がジャングルの猛暑と雨の中で命を失ったとされる。そうした過酷な状況のもとチベットに帰還することができたのが、あのトンミ・サンボータである。彼はチベットに帰還した後、現在のチベット語の基礎となる文字と文法構造を創り上げたとされるが、彼がこの偉大な仕事を成し遂げた場所が、パボンカの頂上、つまりソンツェン・ガンポの宮殿だったと言われている。

ところでパボンカ・リンポチェは、実はパボンカ二世である。というのは、後になって彼は、この岩山の上にある小さな寺院のケンポ（僧院長）の転生であることが認められたからである。こうした理由から、彼はしばしば‘パボンカ・ケントゥル’——‘パボンカの僧院長の転生’——とも呼ばれることもある。パボンカ・リンポチェのフル・ネームは、‘キャプジェ・パボンカパ・ジェツン・ジャンパ・テンジン・ティンレー・ギャツォ・ペル・サンボ’であるが、これは「最高の帰依拠にして慈愛に満ちたパボンカ出身の至尊、仏陀の教えを保持する、吉兆にして良好なる偉業の大海」という意味である。また彼は密教の教えに精通していたことから‘デチェン・ニンポ’——‘大樂の心髓’——と呼ばれることもある。（念のために言っておくと、私たちチベット人は、偉大な宗教者を‘ツォンカパ’とか‘パボンカ’というように、いわゆる‘裸名’で呼ぶことは、とても失礼なことであると考えている。しかしここでは、西欧世界の読者たちに配慮して、チベット人の名前を簡略化して表記することにしておきたい。）

セラ・メイ仏教大学でのパボンカ・リンポチェの経歴は、特に際だったものではなかったようである。彼はゲシェー（仏教学博士）の学位を取得しているが、同じゲシェーでも‘リンセ’の位階に到達したのみである。‘リンセ’というのは、自分が所属する寺院の試験には合格したが、それよりも高度な幾つかのレベル、例えば‘ハランパ’のような位階を獲得するには至らなかったということである。‘ハランパ’の資格を得るためには、気の遠くなるような回数試験や問答を、様々な寺院の公の場で行い、最後にはノル布林カの夏の離宮で、ダライ・ラマと彼の教師たち立ち会いのもとで行われる試験にパスしなければならない。パボンカ・リンポチェの名声が広まり始めたのは、セラ・メイを卒業した後、ラサ郊外で彼が説法するようになってからである。彼は次第に膨大な数の信徒を集めるようになり、やがて民衆の教師としての非凡な才能を発揮し始めた。パボンカ・リンポチェはあまり背が高い方ではなかった——ちなみに私も、たしか170センチくらいしかなかった——が、上半身ががっちりとしていて、壇上に上がると、玉座がいつ

ばいになるように見えた。

パボンカ・リンポチェの声は、驚異的にパワフルである。彼は数千人もの群衆の前で何度も説法を行ったが、いつでも全ての人々が彼の声に明瞭に聞き取ることができた（当時のチベットにはマイクや拡声器は存在しなかった）。もちろん、そんなことが可能だったトリックの一部は、説法を聞きに来た人々を——一般の人々は胡座をかいて床に、ラマたちは会場の上段に、といった風に——チベタン・スタイルですし詰めにしてしまうことである。しかし、それでも会場の入り口には中に入れなかった人々が溢れかえっていた。なかには屋根によじ登って窓からパボンカ・リンポチェの姿を覗き込んでいる人たちもいたくらいである。

パボンカ・リンポチェは、法話を聞きに来た人々と心を通わせることができるような、何とも不思議な才能を持っていた。その希有な才能によってパボンカ・リンポチェは、私たち僧侶ばかりか、一般の人々にとっても大切な教師になったのである。一般的に言って、私たちが寺院で学ぶ教えの大半は、とても専門的なものである。それに僧侶達が次の学問課程に進級するためには、仏陀の教えを厳密に分析するために必要な論理学の試験に合格しなければならない。こうしたメソッドは、仏教を体系的に学ぶためには実に有効な手段であり、また、仏陀の教えを他の人々に伝える際にも役立つのである。しかし素人の人達にしてみれば、このような方法によって仏教を学ぶことは、能力的にも時間的にも困難である。ところがパボンカ・リンポチェの偉大なところは、どんなレベルの人々の心もすぐにつかんでしまい、彼らを導く方法を容易に見つけ出してしまうことである。

彼の最大の武器は、ユーモアだった。チベットでは、大衆の面前で行われる法話が、休憩を挟まないで、十時間とかそれ以上、ぶっ続けて行われることがある。こんな長い時間、集中力を保つことができるのは、偉大な聖者ぐらいなものだ。だから当然、聴衆の一部は法話の最中にウトウトと居眠りを始めたり、空想に耽ったりし始める。そんなとき、パボンカ・リンポチェは急に話を変えて、何か面白い話や、教訓を交えたジョークを始めるのである。こうして人々の中にドツと笑いが湧き起こると、それまで夢見心地だった人たちがびっくりして我に返るのである。こういう人たちは大抵、まわりをキョロキョロと見回して、隣の人に、いまリンポチェが言った冗談を教えて欲しいと懇願したものだ。

彼の法話が聴衆に与える効果は、目を見張るほど即効性のあるものだった。私が今でもよく覚えているのは、ダボン・ツァゴという人物のことである。彼は貴族の出身で、国防大臣と同等の地位に就いていた。当時、公衆の面前で行われる法話は、宗教的な行事であると同時に、社交の場でもあった。そのため、貴族階級にある人々が一張羅を着て姿を現すことがよくあった。それは時に、仏法を聞きに来たというよりは、ただ姿を見せるために来たとしか思えないようなものもあった。あるとき、その名将が全身をシルクでめかしこんで、丁寧に結った髷から長い髪を揺らして——これは昔のチベットではよく見られたもので、ファッションの最先端をいくものだった——法話が行われる会場にさっそうと姿を現したことがあった。ベルトには儀式的の時に使う大きな剣がぶらさがっていて、彼が偉そうに歩くたびにガチャガチャと音がする。

法話の第一部が終わる頃には、彼はじっと考え込んだ様子で、静かに会場を離れていった。身につけていた武器は、布にくるんで持ち帰ったようである。後日、彼は自慢の戦士の髷を切り落としてリンポチェの前に現れ、居士戒の授与を願い出た。その後ダボン・ツァゴは、パボンカ・

リンポチェが法話を行う時には、いつでもリンポチェの後に付いて行くようになった。

パボンカ・リンポチェの名声はすぐに広まり、やがてセラ寺のガクパ仏教大学が彼の隠棲修行のための大規模な施設を、パボンカの丘陵に建設するほどまでになった。この施設は、タシ・チュリン——‘幸運なる孤島’——と呼ばれる。そこには60人ほどの僧侶たちが常時滞在しており、私の記憶によれば、二人の僧侶の秘書、財務管理者、その他にリンポチェの多忙なスケジュールを管理するための付き人が17人ほど住んでいた。リンポチェは自分の時間を、この施設で過ごす時間と、山のさらに上方にある洞窟の入り口付近に建てられた小さな瞑想小屋で過ごす時間とに分けていた。

パボンカ・リンポチェが瞑想の拠点としていた洞窟は‘タクデン’と呼ばれている。この洞窟の中央に位置する小部屋はとても高い丸天井になっていて、それがとても高いので、いつも均等に光が差し込むことはなく、まるで暗闇が絶えず増大しているように感じられる。また、その天井の中央には、自然にできた不思議な三角形の模様が浮き出ている。この模様は、密教聖典の中でしばしば言及される神秘の文字と、まったく同じ形をしていた。

この素晴らしい洞窟の隅には岩から湧き水が染み出ている、その上部には、よく女尊の額に描かれる‘第三の眼’と、とてもよく似た形が浮かび上がっている。‘第三の眼’という言葉——この言葉は皆さんもよく耳にされることあると思うが——は、およそ隠喩的なものであって、これは心的な覚醒を象徴したものである。私たちは、この洞窟がダーキニー——仏教における‘天使’のようなものと言えれば分かってもらえるだろうか——の住処であると信じていた。人々の中には、不思議な女性がこの洞窟から出てくるのを見たと言う人もいた。しかし不思議なことに、この女性が洞窟の中に入っていくのを見たという人は誰もいなかった。

私がパボンカ・リンポチェに初めて会ったのは、タシ・チュリンにあるリンポチェのプライベート・ルームだった。リンポチェは東チベットの法話の旅が長引いたようで、そのときは、まだ帰ってきたばかりのようだった。当時私はまだ粗暴な十代の少年で、ギャロンでニエルパという面倒な仕事を任されていた。ニエルパとは燃料や食料を補給する係のことで、数百人の僧侶たちが生活するに十分な食料はあるかとか、薪は足りているかとか、そういうことを確認する係のことである。リンポチェはギャロンの卒業生だったので、私たちは法話の旅から帰ってくるリンポチェのお迎えと、贈り物を届けるための委員をタシ・チュリンに派遣することになっていた。私は‘ニエルパ’として、生活必需品を準備したり、それを運ぶ手伝いをする仕事を任されていたのである。

パボンカ・リンポチェはいつも口癖のようにして、何にでも「よし！よし！」と言ってまわっていたものだ。今でもはっきり覚えているが、私がリンポチェの御前に伺ったときも、私の頭に手をあてて「よし！よし！さあ、お前は良い子だ！」と仰ってくれた。私はまるでリンポチェから灌頂を受けたような気持ちになって、これからも学問を続けることができるような気持ちになったものである。

私が18歳の頃、パボンカ・リンポチェがセラ・メイ仏教大学から菩提道次第についての法話を依頼されたことがあった。リンポチェは当時、この種の依頼をひっきりなしに受けていた。クライアントの多くは、来世のために功德を積んでおきたいと願う裕福なパトロン達であったり、

あるいは、将来自分の弟子たちに教えを伝授するために特別な教えを授かりたいと願う僧侶たちであった。リンポチェはいつも、そうした依頼に対して前向きに検討すると約束した。ある時には、大衆の面前で法話を行うことで、複数の方面からの依頼を纏めて満足させようとすることもあった。

法話が行われる時は、通常、数ヶ月前くらいに事前の告知がある。スポンサーとなっている人たちは、ラサ郊外の大きな寺院の集会場を借りたり、ラサにある巨大な本堂をあらかじめ予約しておく。私たち僧侶は、普段通りの授業がある場合でも、法話を聞きに行くためにラサまでの数時間かけて赴き、晩にはまたすぐ、寺院の中庭で行われる問答のために戻らなければならなかった（当時、チベットには車が無かった）。年配の僧侶たちは、私たちよりも先に出発して、私たちより後に帰ってきたり、法話が行われている間だけ、ラサに滞在することが許された。年配の僧侶たちにとって、この道程はかなり過酷なものだったからである。

セラ・メイで行われたリンポチェの特別講演は、まるまる三ヶ月間に渡って行われた。私たちは一日に六時間——午前中に三時間、昼食の休憩を挟んで、午後三時間——じっと座ったままリンポチェの話に耳を傾けた。パボンカ・リンポチェはツォンカパ大師が著したラムリム・チェンポ（『菩提道次第広論』）を、丁寧かつ明晰に解説した。パボンカ・リンポチェはツォンカパの著作の注釈書も著している。およそ一万人の僧侶が出席したこの法話の中で、パボンカ・リンポチェは『菩提道次第』に関連する八つの古典的なテクストの全てに言及をした。

その場にいた多くの聴衆と同様に、私もまたリンポチェの教えの力に圧倒された。その教えの内容のほとんどは、既に聞いたことがあるものばかりだった。しかし私は、リンポチェの口から発せられる教えや加持の力が、私の心にグサリと突き刺さるのをはっきりと感じたのである。このとき私は、人間という貴重な命を持って生まれたことの幸運、人生の短さ、また、自分が世界でもっとも大きな仏教寺院の一つで学ぶという幸運に恵まれながら貴重な時間を無駄にして過ごしていること、さらに、このまま私が死んだら一体どんなことが起こるのだろう——そんなことを身にしみて感じたのである。

この瞬間、私は自己と他者の両方のために仏法の道を極めようと決意した。今でも思い出すが、リンポチェの法話が終わった後、私は興奮状態のまま寺に帰って、ゲシェ・ナムドゥル先生に自分が改心したことを告げた。

——今日からこの悪ガキは一生懸命勉強をします！そして必ず、ゲシェーになります！すると、ゲシェ・ナムドゥルは笑いながら私に言った。

——そうか！おまえがゲシェーになる日は、私がガンデン・ティパになる日だな！

ガンデン・ティパというのは、チベットにおける最高の宗教的地位の一つであり、ツォンカパ大師の座を継承する人物のことである。この地位に就くためには、ゲシェーの最高位である‘ハランパ’の資格を得たのち、密教の専門的な研究機関である二つの大学のいずれかの学長に就任する必要がある。私の僧院で教鞭を執っている先生の中で最高位は‘ツォクランパ’で、まだ‘ハランパ’の資格を得た人はいなかった。だからガンデン・ティパになることなど、到底できるはずもない。私たちはそのことを知っていた。だから私は——今となってはこれが良かったのであるが——急に腹が立って、ゲシェ・ナムドゥルに向かって「僕はただのゲシェーじゃなくて、ハランパのゲシェーになります！」と誓ってしまった。その後、私が数々の試験をパスして、ハランパという最高の栄誉を手にする、ゲシェ・ナムドゥルはおずおずと私の所にやってきて、その日の問答にどんなテーマを取り上げたら良いか、遠回しに聞いてくるようになったのである。

この出来事はパボンカ・リンポチェが私にくれた大切な宝物であった。パボンカ・リンポチェの法話を聞いたことで私は、人生が如何に貴重で短いものであるかということ実感し、他者を救いたいという目的をしっかりと心に留めて、学業に情熱を傾けることができるようになったのである。それまで私は、学舎の筆記係、つまり手紙を代筆する事務員のような仕事をしていた。ある日私は、勉強に打ち込む時間を増やすために自分が持っていた高価なペンや紙をすべて仲間達にあげてしまった。彼らはそれを喜んで受け取った。

そんな時、私にとって深刻な事態が起きた。政府の計画で、ゲシェ・ナムドゥルと私が南チベットの寺院に就任するという話が持ち上がったのである。在職期間は6年間。私は即座に、そのポストに就いたことによって生じる含み損を計算した。何故なら、その頃の私には、まだ般若学専門的な思想について学ぶ課程が一年、正しい見解について学ぶ中観学の課程が二年、智到彼岸と律学を学ぶ二年間の最終課程が残っていたからである。これらは皆、とても大切な仏教のテーマである。私はどうしてもこれらの課程を修了しなかった。だから、勇気を振り絞って先生の所に行き、セラ・メイに残ってこのまま学業を続けることを許可してほしいと願い出た。

みんなを驚かせたことは、先生が私の願いを受け入れ、代わりにあの楽天家のルームメイトを連れて行くことに決めたことである。彼は私に宿舎の鍵を渡して学舎をあとにした。周囲の人々は、どうしてこんな滅多にないチャンスに逃すのか理解できず、私のことを‘ギャロン・チュンゼ’——ギャロンの本の虫——と呼ぶようになった。しかし、私の研究は‘ミクセー’——あらゆる他の仕事を免除される特別な地位——を得られるまで進展した。そのお陰で、一秒たりとも無駄にすることなく学業に専念することができたのである。

いま考えて見れば、この時期は私にとって人生の大きな転換期であったと思う。その理由は三つある。一つは、パボンカ・リンポチェが私の心に放棄と利他の精神を植え付けてくれたこと。二つめは、精神の道を追求するために、財産や地位を捨て去ったこと。そして三つ目は、実践や研究に専念するために十分な時間を得ることができたということである。三番目の理由には、あのいたずら者のルームメイトから離れたことも含まれるだろうし、また、これから話すジャンペル・センゲという尊敬すべき人物に出会うことができた幸運も含まれるだろう。

ジャンペル・センゲは私よりも一つ上のクラスで学んでいた友人である。当時の僧院の習慣では、カリキュラムのある時点で、一つ上のクラスと一緒に授業を受ける機会が設けられていた。皆さんがこれから読みすすめていく教えの中に登場する何人かの高僧たちがそうであるように、

ジャンペル・センゲもまた、もともとは他の宗教伝統の中で育った人だった。彼はある種の懐疑論者で、いろいろと逡巡したあげく、かなり年をいってから私たちの僧院にやってきた。僧院での生活を通じて、ジャンペル・センゲは私の心の師となった。私たちは授業が終わると毎日、その日に学んだことを一緒に復習したり、お互いに問答の主題を出し合ったりして、何時間も同じ時を過ごした。私は、良き精神の友というものがいかに大切であるかということ、彼を通じて学んだのである。その後、私たちは一緒にゲシェの最高位の資格を得ることができた。私たちが国を失った後、彼はイタリアに渡って、高名なチベット学者であるトゥッチ教授の指導者となり、その地で他界した。

パボンカ・リンポチェが亡くなる前に、私が最後の試験を受けることができたのは幸運なことだった。セラ・メイで行われた法話の後、リンポチェは南チベットのロカ地方に行って、そこで多くの弟子たちに教えを説いた。彼はさらにダクポ地方に赴いて説法を続け、そこで、一九四一年、六十三歳のときにこの世を去った。私たちの国の習慣では、神聖な人物の身体は火葬し、その遺灰を小さな仏塔に納める。私はリンポチェの遺骸が彼の山の隠遁修行場であるタシ・チュリンに戻された日のことを、いまでもはっきりと覚えている。新しい仏塔が建てられ、大勢の僧侶たちが弔問に訪れて、リンポチェに最後の供物を捧げた。

パボンカ・リンポチェの転生者は、中央チベットのディクン地方で生まれた。当時は中国がチベットにはじめて侵攻した頃で、彼らが私たちの国を支配し始めていた物騒な時期だった。パボンカ・リンポチェの転生者は人々を連れてヒマラヤ山脈を越え、インド平原に逃れた。この危険な長旅を生き残った僧侶たちの殆どは、インド政府によって西インドのベンガル州のジャングルの中にあるバクサという町に案内され、その刑務所跡地に暫定的に設けられた亡命キャンプに移された。(この時、私が住んでいた寺院も砲撃を受け、私も切迫した生命の危険にさらされた。そしてインドに亡命するとすぐ、ダライラマからダラムサラに新しく創設された教育機関で仕事に従事するように指示された。)バクサの刑務所は、嘗て英国がインドを統治していた時代に建設されたものである。この刑務所は人里離れた場所に位置しており、周りを厚い鉄扉とコンクリートで囲まれた巨大な建物だった。この刑務所はインド独立運動の指導者であったマハトマ・ガンジーやパンディット・ネルーが収容されたことでも知られている。

インドは豊かな国であるとは言えない。しかし、彼らは私たちが亡命するにあたって最大限の努力をしてくれた。バクサの刑務所は、人口の過密に悩むこの国で、インドの人々が私たちのために用意してくれた緊急の住居であった。しかし、ジャングルの気候は高温多湿であり、私たちの祖国の気候とはまったく正反対である。千年以上も前に文字を持ち帰るためにインドに派遣された人々のように、この時期に多くの僧侶たちが結核と熱帯地域特有の病に倒れ、そして残念なことに、彼らの多くが命を失った。

しかし、バクサの刑務所には一つだけ良いところがあった。それは、この刑務所がどの都市からも離れた辺境に位置していたということである。こうした予期せぬ条件のおかげで、バクサには、チベットの歴史上初めて各寺院・各宗派の錚々たる面々が一堂に会し、そこで十年ほどの間、共同生活を送ることになったのである。この陸の孤島においても、パボンカ・リンポチェ二世の学識は一際輝いていた。彼は他の僧侶たちに文法や作文を教えながら、めきめきと頭角をあらわし、早々とゲシェーの試験に挑戦した。しかし、ゲシェーの試験を受けている間、パボンカ・リン

ポチェ二世は痛々しいほどに衰弱してゆき、全ての試験が終わると同時に病院に運ばれた。彼の身体は既に重い結核に蝕まれていたのである。そしてある日、彼は突然亡くなった。パボンカ・リンポチェ二世の死は、私たち僧侶を絶望に陥れた。彼の身近にいた人たちは、パボンカ・リンポチェ二世が私たちをこの絶望的な時代に置きざりにする道を選択したことに絶望し、中には自殺を試みる者もいた——それがどれだけ罪深いことか知っているにも関わらず。

その後、パボンカ・リンポチェの二人目の転生者は、彼の生前の弟子であったキャプジェ・ティチャン・リンポチェによってインドのダージリンで発見された。この前途有望な若い僧侶は現在、インドに新しく建設されたセラ寺に住んでいる。インドのセラ寺は、バクサの厳しい環境と試練を生き抜いた僧侶たちによって南インドに建立されたものである。現在パボンカ・リンポチェ三世は、彼の支持者たちによって建設された住居の中で快適な生活を送っている。彼の支持者たちの中には、二世代も前からリンポチェの世話をしている人たちもいる。また、彼の主任教官であった故ギクラ、ロプサン・サムテン師は、嘗てはインドに新設されたギャロン僧院の教師であり、セラメイ学術基金の理事を務めた人だった。セラメイ学術基金は、若い僧侶達が伝統的な学問課程に基づいて研究・実践を続けることができるように、私と私の弟子たちが創設したものである。

初代パボンカ・リンポチェは、今でも弟子たちの心の中で生き続けており、生前彼が著した膨大な著作の中で生き続けている。およそ十五巻から成るパボンカ・リンポチェの全集には、顕密双方の広範な論題を網羅した約百点の論文が所収されている。また彼の弟子たちは、パボンカ・リンポチェの教えを後世に伝えるために大きな貢献を果たしている。何故なら、今日読むことができるパボンカ・リンポチェの代表的著作の大半が、パボンカ・リンポチェが口頭で説いた教えの記録であり、彼の弟子たちによって書き記されたものだからである。

これから紹介する『道の三つの根本』の註釈は、ロプサン・ドルジェによる講義録の撰集に収められているものである。ロプサン・ドルジェが『菩提道次第』について説いた大作『手中の解脱』は、現在のダライラマの二人の教育係のうちの一人であり、また私の根本ラマでもあったキャプジェ・ティチャン・リンポチェ（ロプサン・イエシエ・テンジン・ギャツォ）によって編纂された。キャプジェ・ティチャン・リンポチェは、自らの教えを九巻に纏めた大作を残しているほか、二巻から成るパボンカ・リンポチェの詳細な伝記を著している。私が『手中の解脱』の英訳に着手したのも、ティチャン・リンポチェの勧めによるものだった。この英訳書の第一巻は今年出版される予定である。

チベットでは何世紀にも渡って膨大な数の聖者や大学者を輩出しているのだから、パボンカ・リンポチェのように、あるラマの教えがその存命中に‘古典’として読まれるようになることは極めて希である。勿論、例外が無いわけではない。例えば『道の三つの根本』を著したツォンカパなどは、こうした希な例にあたる。

ツォンカパの正式な名前は、ギャワ・ジェ・ツォンカパ・チェンポ・ロプサン・ダクパという。彼の存在は、チベット仏教史において特別な位置を占めていると言って良い。ツォンカパは、いままでに私たちの国に誕生した人物のなかで、最高にして完全な哲学者であり、最も能弁な著述家であり、仏教の体系化に最も成功した人物であった。チベットの扉がなかば強制的に開かれた今、ツォンカパの思想がもっと人々に知られるようになれば、彼が人類史上最も偉大な思想家の一人であることが世界中で認められるようになるだろう。

ツォンカパは、1357年、北西チベットのナムド地方にあるツォンカという場所で生まれた（だから、彼の名前は「ツォンカの人（ツォンカ・パ）」というのである）。幼少の頃、法王カルマパ・ロルペードルジェから優婆塞戒を授かり、クンガ・ニンボという名前をもらった。また、八歳になるまでに沙弥戒を授かり、既に密教の灌頂を受けていたとされる。ツォンカパは学問に優れていたことから、十六歳の時、教師たちに勧められて、賢者たちから教えるために中央チベットへ旅に出た。

ツォンカパがこの後に学んだことを、ここで全て列挙するのは不可能である。一言でいって彼は、彼は様々な古典的学問と、仏教の顕教・密教の全てを学んだのである。参考までにツォンカパが習得したとされる教えの一部をあげると、チェンガ・チューキ・ギャルポからナーローと大印の秘法を、ジェ・クンチョク・キャブから古代医学を、デワ・チェン寺のラマたちと偉大なるサキャ派の導師レンダワ、ニャウン・クンガ・ペルから般若經典を、ヘ・リンポチェから道次第を、ロチェン・ドゥンサン、レンダワ、ドルジェ・リンチェンから古典論理学を、ロンチェン・ドゥンサン、レンダワから知識宝を、レンダワとケンチェン・シュキャブ・サンボから中論を、ケンチェン・ロセルから古いスートラを、レンダワとチュキャブ・サンボから戒律学を、イエシエ・ギェルツェン他から時輪タントラを、レンダワとヘ・リンポチェ他から（プトゥンの体系にしたがって）様々な密教聖典を、ケンチェン・サンボから時明者や菩薩の偉業に関する目録、および修心について書かれた初期の文献に関する教説を授けられた——こうしたことを挙げれば切りがない。

またツォンカパはこの他にも、夢の中やヴィジョン、あるいは直示を通じて、聖者から教える授けられたとされている。例えば、彼は長年にわたって文殊菩薩から教えるを受けていたと言われている。初めのうちは文殊菩薩の啓示を受けとることができるラマ・ウマパという人物を媒介して文殊菩薩から教えるを受け取っていたが、後になると自分自身で文殊菩薩という「神的存在」に会い、教えるを受け取ることができるようになったと言われている。

この「神的存在」という言葉について、ひとこと説明を加えておこう。私たち仏教徒は、宇宙には様々なブッダが住していると信じており、もしそうすることによって衆生を救うことができるならば、ブッダは一つ以上の惑星に同時に姿を顕すことができると考えている。私たちはブッダを、生命が究極的な進化を遂げたあり方であると捉えており、一切の事象を知ることができる存在だと信じている。しかし、私たちはブッダが全能であるとは考えていない。例えば、ブッダは世界を創造することはできない（これは私たち自身の過去のカルマ——善のカルマ、悪のカルマ——によって創造されるのである）し、ブッダ自身が私たちの一切の苦しみを取り除くこともできない（これもまた、私たちの過去の行為に由来するものであり、自分たち自身で取り除かなければならないものである）。私たちはブッダというものをそのように捉えている。

仏陀の教えるを学び、その実践を通じて、人は誰でもブッダになることができる——私たちはそう信じている。だから、ある「神的存在」が聖者に直接ないし別の仕方で顕れたと言われるとき、これは仏教が神々の存在を認めているという意味ではない。こうした言明は、一切の苦を克服して完全な智慧を獲得した人物なら誰でも、人々を究極的な境地へと導く手助けをするために、ある一定の姿をもって私たちの前に現れることができるということを意味しているのである。

数え切れないほどの多くの教えを授かったのち、ツォンカパは具足戒を受けた。この儀式は彼が二十五歳の時、ラサ南部のヤルルンという場所で執り行われた。ツォンカパは沙弥戒を授けて出家した際、既にロプサン・ダクパという僧名をもらっていた。今でもチベットでは、多くの人々がこの「ロプサン」という名前を付けているが、これはチベット人の心の中に、ツォンカパという名前が深く刻まれていることを示している。

一人の学僧から教師になるまでのツォンカパの変遷は、極めて加速度的なものであった。更にツォンカパは、自身の教師たちにも教えを説くようになったと言われる。ここから先の彼の生涯については、ここで彼の経歴を簡単に辿るよりも、今日の仏教にツォンカパが与えた影響を見ることによって、より良く理解することができるだろう。ツォンカパは1419年、62歳の時にガンデン寺で最期を迎えたとされる。

仏教は現在、世界の大宗教の一つに数えられているが、実際には絶滅の危機に晒されていると言っている。いくつかの国では、仏教は政治的暴力によって抹消されてしまった。また別の国々では、たしかに残ってはいるが、概して言えば、仏教の完全な姿が保存されているとは言い難い。仏陀が説いた所謂‘大きな’道と‘小さな’道は、のちの四大学派によって継承されたが、これらの四つすべてが、今でも実際に研究・実践されているのは、チベットの伝統において他に無い。この伝統は、今でも私たちの僧院生活の中で息づいている。こうした伝統を継承する支柱としての役割を果たしているのが、ガンデン、デブン、セラという三つの寺院である。ツォンカパの円熟期について知るためには、仏道の最後の砦であるこれら三つの寺院に与えた彼の影響について見るのが良いだろう。

実際そこには、至るところにツォンカパの影響を見て取ることができる。たとえばセラ寺の例を挙げてみよう。この寺院では、若い僧侶はまず論理学の勉強から始めるのであるが、その際に教科書として使用されるのは大抵、『解脱への道』か『論理の宝石』という書物である。これらの書物はいずれも、ツォンカパの直弟子によって書かれたものである。前者はギェルツァブ・ジェ(1362-1432)、後者はギャワ・ゲンドゥン・ドゥブ(1391-1475)によって著された。

その後12年間はいわゆる‘般若学’を学ぶのであるが、この課程で僧侶たちはキシユの導師とデワ・チェンが著した『黄金の輪飾り』という註釈書を用いる。その後、僧侶は最期の戒を授かると、さらにギェルツァブ・ジェの『要訣の宝石』の研究に進むことになる。更に般若学の専門的な論題を研究する課程に進む頃には、仏教諸派の確実な教理について説いた、ツォンカパの『善説の心髄』の230ページ全てを記憶することに全身全霊を注ぐことになるだろう。

こうした研究を進めている間、若い僧侶たちは屢々、寺院を訪問するラマによって問答を課される時がある。時にはダライラマ自身が、若い僧侶たちに問答を課す時もある。(現在のダライラマは14世であるが、ダライラマ一世はツォンカパの直弟子であった)。問答で試される一般的な命題の底本となっているのは、ツォンカパが著した『偉大なる道の階梯』や『菩薩の歩むべき道』——この書物の註釈書としては、ギェルツァブ・ジェの『菩薩の門』が用いられることが多い——や、いま私たちが読んで『道の三つの根本』などである。

このあと僧侶たちは“中観学”の課程に進む。これは仏教の中で最も高度にして難解な哲学である。この際、僧侶たちは、インドの古い註釈書を理解するために、ツォンカパの『広釈』を参考にする。また、理解が深まっていくにつれて、ツォンカパの弟子であるケドゥブ・ジェ

(1385–1438) が空性について解説した『開眼』を読むこともある。

その他にも、この偉大な師の影響は至る所に見出される。研究を続けている間、若い僧侶たちが居を定める寺院は、ツォンカパや彼の直弟子によって建てられたものである。ガンデン寺は1409年にツォンカパによって建立された。デプン寺は1416年にジャムヤン・チュージェ・タシ・ペルデンによって建てられた。セラ寺はジャムチェン・チュージェ・シャキヤ・イエシェが1419年に建てたものである。また、僧侶たちが身につけている法衣の一部は、ツォンカパによってデザインされたものである。さらに僧侶たちは、部屋に戻って‘ラマの実践法’と呼ばれる方法に従って瞑想を始めるとき、最初に師を心の中に思い浮かべる。彼らは数珠をくりながら‘ミクツェマ’と呼ばれる賛嘆と皈依の言葉——西欧の人々にとっての天使祝詞のようなものである——を唱えるのである。

また僧侶たちがゲシェーの試験に挑むのは、大モンラム祭と呼ばれる祝祭の期間である。この大祭は人々が宗教的・精神的な活動に専念するために設けられた三週間の祝祭であり、ツォンカパが1408年に始めたものである。またモンゴル人の僧侶は、自分の誕生日を光の大祭が開催される旧暦の10月25日から数えるだろう。この日はツォンカパの功績を記念する日である。

このあと更に“知識の宝”と呼ばれる段階に至る学問課程があり、僧侶が希望すれば研究を継続することができる。その際、基本的な註釈書として用いられるのは、ツォンカパの弟子であったダライラマ一世の註釈書である。この段階に入ると僧侶たちは既に論理学専門家の域に達しており、ゲェルワン・ティンレー・ナムゲェルが百年ほど前に著した問答術の論説書である『ゲェルワンの宝蔵』を用いて研究することが許される。ゲェルワン・ティンレー・ナムゲェルは『偉大なる伝記』と呼ばれるツォンカパの伝記を著したことで有名である。

こうした全て課程を通じ、僧侶たちは毎日休むことなく問答に参加する。しかし彼らは、問答の答えが書いてある本やノートをいつも手元に置いているわけではない。僧侶たちは、その日に学んだ授業の内容を思い出し、テキストを頭の中で思い出しながら理解を保ち続けなければならない。彼らのこうした努力もツォンカパを手本にしたものである。ツォンカパは十代の頃、中央チベットを旅行して、デワ・チェン、サキヤ、サンデン、ガクロン、ダムリン、エー、ネニンなどの寺院で問答を行い、卓越した能力を発揮したと言われている。

ゲシェーの試験に合格すると、僧侶たちには、二つの密教大学のいずれかで学ぶ資格が与えられる。大学ではツォンカパが著した『偉大なる密道の階梯』に拠り所にしなが、密教を学ぶことになる。また、ケドゥブ・ジェをはじめとするツォンカパの優れた弟子達が密教について詳細に記した典籍群を研究することにもなるだろう。ツォンカパと彼の主要な二人の弟子の全集は『父とその息子達の全集』と呼ばれ、これは通常一セットで出版されている。この全集は少なくとも38巻から成り、仏教哲学の様々なテーマを網羅した約300点もの論文が収められている。ツォンカパの著作は、初期仏教聖典の参照の膨大さ、論理的法則の厳密性と定義の正確さ、他の追隨を許さないチベット語彙の豊富さ、古典文法の完璧な順守、初心者から上級者までのあらゆるレベルの学生たちに配慮した神経の細やかさ——何れの側面においても他の追隨を許さない。

初心者から上級者までのあらゆるレベルの学生たちに配慮した神経の細やかさ——この点が、『道の三つの根本』が何世紀にも渡って広く読まれてきた理由の一つである。この書物の中でツォンカパは、仏教の教えの全てを、たった十四行から成る文章の中に収めようとしている。この著

作が、純粋な心と正しい努力をもって学ばれるならば、人は悟りへと導かれることができる。私たちはそう考えている。

『道の三つの根本』の最後の部分で明らかにされているように、この書物はツォンカパがンガワン・ダクパ——ツァコ・ワンポ、つまり“ツァコの遁世行者”と呼ばれることもある——に説いた教えである。しかしンガワン・ダクパという人物は、ツォンカパの弟子達の中ではそれほど目立った存在ではなかった。ツォンカパの生涯を描いたものに‘ツォンカ・ゲチュ’と呼ばれる十五の絵巻⁽²⁾からなる作品があるが、その中にツォンカパを取り囲む弟子達の一人として、ンガワン・ダクパの素晴らしい肖像が描かれている。

不思議なことだが、私たちがンガワン・ダクパについて知ることが出来る最上の資料は、パボンカ・リンポチェの伝記である。パボンカ・リンポチェの伝記の一卷に、パボンカ・リンポチェとセラ寺にやってきた母親のやりとりについて記した印象的なシーンがある。セラ寺の生活があまりにも厳格なものであることを知って、母親は悲しい気持ちになった。どうしてこんなことになってしまったのか、何故、息子は偉大なチャンキヤの転生などに認定されてしまったのか——チャンキヤは、およそ二百年ほど前、中国皇帝のアドバイザーとして仕えた人物である。北京の宮殿の側に建てられたチャンキヤの豪邸は、新しい転生者がやってくるのを首を長くして待ち構えていた。パボンカ・リンポチェは、自分の息子の運命を嘆く母親に対し、次のように言った。

チャンキヤ・ロールペー・ドルジェの智慧と功德の、ほんの僅かな痕跡ですらも、今までの私が残してきたと言えるでしょうか。私はこの偉大な人物に対し計り知れない尊崇と信奉の念を抱いています。彼の著作は他のどの經典よりも確実な理解を私に与えてくれました。また私は若い頃からずっと、チャンキヤが座っていた中国の椅子に強い関心を持っていましたし、中国のあらゆるものに強い愛情を注いできました。

母よ。あなたは今まで、私がチャンキヤの転生に認められた経緯について、色々なことを語って聞かせてくれました。あなたの話を聞いているうちに、私は、自分が本当はチャンキヤではないかもしれないという疑念を少しずつ払拭していくことができました。やがて私は‘ひょっとしたら自分は本当にチャンキヤ・ロールペー・ドルジェの転生かもしれない’と考えるようになったのです。

時々、私は他の人だったという考えが頭の中をよぎることもあります。別の時代に...そう、偉大で柔和な守護者であるツォンカパがこの世界に生きていた頃、私はツァコの遁世行者——ンガワン・ダクパ——ではなかったかと...そんなことを時々考えるのです。⁽³⁾

パボンカ・リンポチェが自分の想いを語るこの啓示的なシーンを通じて、この自伝の作者は、ンガワン・ダクパの生涯を間接的に叙述しているのである。ツォンカパの生涯を描いた絵画には、ツォンカパがケルという寺院で四人の僧侶たちに教えを説いている場面が描かれている。また、偉大なるジャムヤン・シェパ（1648–1721）の著作には、‘ツォンカパが般若学・論理学・中観学を、ンガワン・ダクパと彼の学友達に説いた’⁽⁴⁾という記述が見受けられる。これはおそらく具足戒を授かった直後のツォンカパが、彼の有名な‘三人の弟子’、つまり、ギェルツァブ・ジェ、ケドゥブ・ジェ、ダライラマ一世と初めて接した時のものと思われる。

パボンカ・リンポチェの伝記の作者は、ンガワン・ダクパが“はじまりの四人”と呼ばれるツォ

ンカパの教え子のグループに属していたとする『秘密伝』の記述を引用している。ここでは、ンガワン・ダクパは、チベットの東方にあるツァコの王族、ギャルモ・ロンの家系に生まれたと書かれている。ギャルモ・ロンは別名でギャロンとも言う。これは、パボンカ・リンポチェが幼少の頃、賢者の序言に基づいて居を置いたセラ・メイ仏教大学の僧院名でもある。

ツォンカパと同様、ンガワン・ダクパもまた、さらなる教えを求めて中央チベットへと旅立った。彼は顕密双方の教えに熟達するようになった後、師に出会って教えを受け、師に同行して東チベットのキシユという地区にあるツェル寺に赴いた。そしてラサに戻ったのち、様々な精神的実践に取り組み始めたと言われている。

ンガワン・ダクパについては、ある有名な話がある。この頃、ンガワン・ダクパと彼の師は共に、夢の内容に特別な関心を払っていた。ある日、ンガワン・ダクパは夢の中で、空中に浮かぶ二つの白法螺貝を見た。これは宗教的な儀式を執り行う際に用いられる角笛のようなものである。二つの法螺貝は彼の膝の上に降りてきて、一つに合体した。

ンガワン・ダクパは夢の中で法螺貝を手にとり、それを吹いた——すると、法螺貝は耳を劈くような音響を放ち、その音は遠方まで響き渡った。ツォンカパはこの夢を解釈して‘ンガワン・ダクパによって仏陀の教えが、彼の故郷であるギャロンまで広められることの予兆である’と述べた。実際、その後ンガワン・ダクパは、東チベットに数百の寺院を創建することに多大な貢献を果たすようになる。まさにツォンカパが予言したとおりになったのである。

パボンカ・リンポチェの伝記には、ンガワン・ダクパとツォンカパの密接な関係を示す記述が、他にも幾つか見受けられる。『道の三つの根本』の最後の行で、ツォンカパはンガワン・ダクパのことを“我が子よ”と呼び、偉大な学者らしからぬ個人的な親愛の情を示している。またツォンカパは、ンガワン・ダクパが教えを請う時には、進んでその要請に応じていたようである。彼は、ンガワン・ダクパの個人的な要請に応じて、『常啼菩薩品』の解説書⁽⁵⁾を著したとも言われている。

彼らの深い繋がりを示す決定的な証拠として、この自伝の作者は、ツォンカパがンガワン・ダクパに宛てたとされる手紙を引用している。この手紙の全文は今でも残っているが、その内容から判断すると、この頃ンガワン・ダクパは長い旅程を終えて既にギャロンに戻っており、そこで人々に教えを説くことに力を注いでいたようである。その手紙にしたためられた短くて美しい文章⁽⁶⁾の中でツォンカパはンガワン・ダクパに、自分の説いた教えに従い、自分と同じように、全生涯をかけて仏法を全うするために行動・祈願するように強く勧めている。そして最後にツォンカパは、自らの悟りの境地の中にンガワン・ダクパを招き入れ、永遠の杯の最初の一口を彼に捧げることを約束するのである。

さて、私がこの小冊の最後に記すことは、あまり明るい話ではない。私たちはチベットから亡命し、中国の軍人たちによってシャングリラから追い払われた。パボンカ・リンポチェが智慧を手に入れたあの場所、私がイエシェ・ロブサンに悪戯をしたあのホールは、砲撃を受けて焼失してしまった。パボンカ・リンポチェの山庵だったタシ・チュリンは、今では奇妙な張り子のような姿を晒している——全面の石壁だけが残り、あとは全て中国の人々にはぎ取られて薪となった。リンポチェが好んで瞑想の場とした、あの不思議な洞窟——タクデン——の入り口付近にあった

瞑想小屋は粉々に粉碎されて、洞窟の入り口に瓦礫となって積み上げられている。今となっては、もう誰もあの洞窟を見つけることはできない。

仏教徒として、私たちチベット人は、中国の人々に対する怒りの感情を持ってはいない。だが、私たちの国とその伝統が失われたことの悲しみ、そして百万人以上の親類や友人たちを失った悲しみを消し去ることはできない。このような境遇に置かれることで、私たちは、人生が如何に貴重で短いものかということ、そして私たちが生きている間に実践を行うことの大切さを、以前よりもはっきりと痛感している。しかしある意味では、私たちが多くのものを失ったことが、世界中の人々に大切なものを与える好機になったと言えるかもしれない。なぜなら、皆さんがいま読み進めようとしている様々な教えが、こうしてチベットの外の世界に紹介されるようになったからである。この小冊が、私たちの真の敵である、欲望や怒りや無知を克服するため役立つことを願って止まない。

1988年5月31日（仏暦4月15日）、仏陀の悟りの日に
セルメイ・ゲシェー・ロプサン・タルチン

註

- (1) この‘チャンキヤ’と呼ばれる系譜の歴史については、E.ジーン・スミス氏による優れた解説がある。例えば“*The collected works of the Tibetan sage Tuken Dharma Vajra*” (pp.1-7, bibliography entry 52.) の序文等を参照。
- (2) この十五の絵巻はチベット国外に少なくとも四セット存在しているが、何れも極めて似通ったものである。何故なら、これらのは何れも木版によって印刷されたものだからである。私が学僧だった頃、このような絵巻はラサ南西のシガツェという町にあるナルタン寺で印刷することができた。おそらく、初めにツォンカパの生涯におきた出来事を伝統的な画法で描き、雇われていた画家達がそれに彩色を施したものと思われる。
- (3) この伝記については、bibliography entry 55. Vol. ♪ , pp.221-2 を参照。
- (4) bibliography entry 27, p.293 を参照。
- (5) この書物については、bibliography entry 64 を参照。
- (6) パボンカ・リンポチェの伝記に引用されている箇所は、bibliography entry 69, p.584 に見受けられる。また、ツォンカパ全集に収められているこの手紙の直後には、ンガワン・ダクパ宛てに書かれたとされる手紙が更に二つ残されているが、このうち最初のものに『道の三つの根本』が含まれている。

著者について

ツォンカパ (1357–1419)

東チベットのツォンカ地区で生まれ。ジェ・リンポチェ・ロブサン・ダクパとも呼ばれる。2,500年に渡る仏教史における最も偉大な注釈者。幼少の頃に戒を授かり、十代のときに仏教のほぼ全ての教えを修得し、教師の勧めに従って中央チベットの大僧院に入学した。同僧院において当時の仏教学者たちのもとで研鑽を積み、また神秘的なヴィジョンを通じて、様々な姿をとって顕れた仏陀から教えを授かったともされる。

『菩提道次第』に関する著作をはじめ、18巻からなるツォンカパの全集には、古代の仏教のあらゆる古典に関する優れた注釈書が収められている。またダライラマ一世を含む彼の多くの弟子達も、数百点にのぼる膨大な仏教哲学・実践の解説書を著している。

ツォンカパが創建したチベットの三つの大寺院では、およそ二万五千人もの僧侶達が何世紀にも渡り仏教経典を学んできた。また、チベットの大モンラム祭を始めたことでも知られている。ラサのガンデン寺で逝去（享年62歳）。

パボンカ・リンポチェ (1878–1941)

ジャンパ・テンジン・ティンレー・ギャツォとも呼ばれる。北中央チベットのツァン地方の指導者の家系に生まれる。少年の時、セラ大僧院の大学の一つであるセラ・メイのギャロン僧院に入学し、その後ゲシェーの資格を獲得した。その力強い法話によって、当時の精神的指導者となる。仏教思想のあらゆる側面について説いた彼の全集は、15巻を数える。彼の最も有名な弟子はキャブジェ・ティチャン・リンポチェ (1901–1981) であり、この人物は現ダライラマの教師であった。南チベットのロカ地区で逝去（享年63歳）。

ゲシェー・ロブサン・タルチン (1921–)

ラサ生まれ。幼少の頃、セラ・メイのギャロン僧院に入学。パボンカ・リンポチェとキャブジェ・ティチャン・リンポチェに師事し、仏教の古典を学ぶ厳格な25年間の課程を修了した。その後、ゲシェーの資格を獲得し、1958年にラサのギュメ密教大学を卒業。1959年以降は、アジアや米国の様々な研究機関で仏教哲学を講じ、1975年にジョージタウン大学で英語学を修めた後は、15年間にわたってニュージャージーの Rashi Gempil Ling, Kalmuk Mongolian Temple の管長を務めた。また彼はニュージャージーとワシントン D.C. の大乘顕密センター (Mahayana Sutra and Tantra Center) の創設者でもあり、仏教経典の膨大な翻訳書の著者でもある。1977年には、初のチベット語ワード・プロセッサの開発を指揮。彼が永久管長を任ぜられているセラ・メイ仏教大学の再建に中心的な役割を果たした人物でもある。

ゲシェー・マイケル・ローチ (1952–)

プリンストン大学卒業。1970年にリチャード・ニクソンから大統領学術栄誉賞を授与される。ウッドロー・ウィルソン国際問題大学院の後援を受けてチベット政府図書館で研究を行ったのち、Rashi Gempil Ling で20年間ゲシェー・タルチンに師事する。1983年に具足戒を受け、1996年に南インドのセラ・メイ仏教大学でゲシェーの資格を得る。その後、セラ・メイ寺の修復事業に貢献した。Manhattan diamond firm 理事, Asian Classics Institute, Asian Classics Input Project, Diamond Abbey, The Three Jewels Outreach Center, Godstow Retreat Center, Diamond Mountain Retreat Center の創設者。2003年までの三年間はリトリートに入っている。